

「日台共栄のタベ」レポート

会員の結束、さらに強固に

理事・事務局長

富澤 賢公



第1部の開会挨拶をする小田村会長

本会の一年を締めくくる恒例の「日台共栄のタベ」を昨年十二月二十三日に東京・アルカディア市ヶ谷で開催した。総統選挙の影響か、その後の台湾政府の動きのためか、出席者は百五十名と例年より少な目だった。しかし参加した精鋭は台湾の為、ひいては日本の為と集い、会員同士の結束をさらに強固なものにした。

第一部は神奈川支部の澁谷陽子さんの司会によって進められ、石井公一郎副会長の開会挨拶で始まり、渡辺利夫・拓殖大学学長による「いまなぜ脱亜論か」(8頁参照)と題した一時間の講演と十五分の質疑応答。引き続き、台湾の日本語世代の人々取材して注目される映画「逍遙日記」のダイジェ

スト版の上映と酒井充子監督の挨拶と解説があった。続いて、小田村四郎会長の閉会の挨拶で第一部を締めた。

第二部は武蔵村山市議の天目石要一郎氏の司会で進められ、黄文雄・常務理事の開会挨拶で始まった。来賓挨拶は、まず注目の台北経済文化代表処の馮寄台代表。新代表が何を話すのか、出席者は一様に硬い表情で固唾を呑んで待っているといった雰囲気だった。

ご本人は下手な日本語とは言いがら、五十年前、家族と日本に五年間滞在した時に覚えたという滑らかな日本語で、就任のいきさつ、ご自身のプロフィール、家族の話等を織り交ぜて十五分ほど話された。本当は代表就任は本意だったが、馬英九総統の四度に

わたる説得で承諾したという。馬総統は「日台関係の重要性」を説き、日本の状況、対台湾感情などを知るため、馮氏の日本語能力を買ったという。馬総統は日本の情報収集に懸命で、そのために、馮代表は赴任直後から多数の政財界人やマスコミ関係者と積極的に会い、ほぼ毎日、外交部を通して馬総統に報告しているという。また、馬総統は馮代表から直接聞くため、異例のことだが来日して一カ月半で帰国して報告したともいう。

この間、聴衆は紳士的に聞き入り、代表が難しい語彙や言い回しに詰まると適切な日本語の助言が会場から出たり、氏のユーモアに笑い、拍手も出るほどであった。さすがに、五十年間外交官を経験された方である。代表も出席者もお互い場に鑑み、空気を讀んだ対応だった。挨拶の最後のころは参加者の表情も心なしか穏やかに見えた。懇親会に及んでも、馮代表はしばらくの間、会員と記念写真を撮ったり

意見を交換したりの和やかな時間を過ごされた。

次の来賓挨拶の「WILL」編集長の花田紀凱さんとジャーナリストの花岡信昭さんは、それぞれに訪台したときに会った馬英九總統の反日ぶりなどを体験談からお話いただいた。続いて井尻秀憲・東京外語大学教授の乾杯の音頭で大忘年会に突入した。

和やかな宴が続く中、小磯明・都議会自民党日台議員連盟幹事長、古田島洋介・日台交流教育会会長、吉田康一郎・都議会議員、湯澤貞・靖国神社元宮司、酒井麻雄・日華親善協会全国連合会副会長、浜井達男・まどか出版社



上篇を脱ぐほどの熱が入った講師の渡辺利夫・拓殖大学学長



訪台時の体験などを交えて解説する映画「追遠日記」の酒井充子監督



注目が集まった本会催しへの初参加となった馮寄台代表の来賓挨拶



代表処などからの豪華賞品が目白押しとなったお楽しみ抽選会

長と挨拶が続いた。また、出席の各支部（千葉・新潟・岐阜・愛知・志賀・神奈川・福井）の紹介があり、代表して川村純彦・千葉県支部長が挨拶をした。さらに今回の「日台共栄の夕べ」が天皇誕生日にあたったことから、高座日台交流の会の野口毅名誉会長が七十五年前を回想して今上陛下御誕生の歌を披露した。

宴もたけなわに達したころ、恒例の「お楽しみ大抽選会」が片木裕一・本部事務局次長の司会で始まった。今回はいつものチャイナエアライン、台湾物産館、産経新聞社、梅園、台湾観光協会に加え、台北駐日経済文化代表処

とダイナスティホリデイ、新潟県支部の水野孝吉氏から初めて賞品をご提供いただき、豪華賞品がずらりと並んで大いに盛り上がった。会員の堀内佐知美さんと田中早苗さんのあでやかな振袖姿のアシスタントが花を添えた。賞品を提供していただいた各社には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、林建良常務理事による「日台関係の改善は他力本願であってはダメ。馬總統の日本を理解する」という馮代表の言葉をもって逆に国民党政府に圧力をかけよう」と熱く語る閉会挨拶と万歳三唱で、来年の発展を祈念してお開きとなった。